

令和元年度 第2回 埼玉県社会教育委員会議 会議録

1 日 時 令和元年11月26日(火) 13:30～15:00

2 会 場 埼玉会館 会議室6C

3 出席した委員 (17人)

生駒章子委員、猪股敏裕委員、井深道子委員、大矢美香委員、
小川直己委員、柿沼トミ子委員、風間重文委員、加藤聡司委員、坂口緑委員、
高澤守委員、寺山昌文委員、長坂道子委員、西村平雪委員、芳賀洋子委員、
又野亜希子委員、松澤正委員、和田明広委員

4 欠席した委員 (3人)

青山鉄兵委員、有田るみ子委員、田辺直也委員

5 あいさつ

埼玉県教育局市町村支援部 関口睦 部長

6 委員の紹介

7 議事の経過

(1) 議長の開会宣言

(2) 会議の公開・非公開

議長が会議の公開・非公開を委員に諮り、公開とする。
傍聴者1名

(3) 会議録署名委員の指名

議長から猪股委員と井深委員が指名された。

(4) 議題及び経過

ア 議題

○「外国人住民との共生社会を目指した地域づくりはどうすればよいか」
について

イ 経過

「外国人住民との共生社会を目指した地域づくりはどうすればよいか」について

議長 「外国人住民との共生社会を目指した地域づくり」について事務局から説明願いたい。

事務局 説明

議長 議題に関しては、事前に委員へテーマを伝えている。まず、外国人の支援を行っている委員から発言をお願いしたい。

委員 外国人との共生社会を目指した地域づくりに向け大事なことが3つある。

1つ目は、子供を育てる主役は保護者であるため、子供だけ支援しても効果はなく、親子を支援することが必要であること。日本語指導員として地域の子供たちと関わっていきこうと親子の日本語支援教室を、2002年頃から地球っ子クラブという名称で活動をしている。その活動の中で、学校に通い始めてから支援しても遅いと気付いた。日本で出産をし、子育てをする外国人が増えている。学校に通い始めてからではなく、出産後あるいは国際結婚後から繋がりがなくてはならない。そこで、埼玉県の国際交流協会やさいたまコープの後押しを得て2009年に立ち上げたのが多文化子育ての会である。そこでは子育て中の保護者が集まって、日本語を勉強するわけではなく、お弁当を持ち寄って日頃の悩み事を話し合うなど日本人の保護者がやっているようなことを同じようにやっている。外国人の子供は年々増えているが、全ての子供が日本語指導を享受できておらず、現在もその状況は変わっていない。また、日本で生まれた外国人の子供、外国から来た外国人の子供など様々な子供がいるが、その多様性に合わせた日本語指導は行き届いていない現状である。日本にいる子供は、日本人でも外国人でも将来的に日本を支えるという意識をもつことが大切である。外国籍の子供は何れ帰国してしまうため、その子供の教育は外国人の保護者に任せておけば足りると思われがちだが、実は違う。日本にいた際に「こんな良い教育を受けた」ということがあった場合は、帰国したとしても、そこで日本を支える人材になると考えて

いる。

2つ目に大事なことは、日本人も外国のことを学び、お互いに壁を低くすることが必要であることだ。私は2005年から「てんきりん」という団体を運営している。外国人の方が日本文化や日本語を学ぶだけでなく、「てんきりん」では、日本人、外国人、障害者など様々な人が集まり、多文化・多世代の学びの場として、それぞれがやりたいことをやっている。その活動をしていく中で、「同じって嬉しい」、「違うって楽しい」を実感し、その考えを広めたいと考えている。「お互いに違いを認めましょう」という言葉はよく聞くが、違いを認めるとはどういうことかということ、同じ点や違う点を知ることである。互いに違いを認め合うことが大切である。「お互いに違うということを受け合う」ことを広めていきたい。

3つ目に大事なことは、国籍を問わず「ありがとう」と言われたいということを受け理解することである。外国人は支援の対象ではなく、一緒に地域を作っていく人材である。本国では活躍していた外国人が、日本に来てから「ありがとう」と言い続けることは彼らにとって寂しいことである。多言語のおはなし会の例がある。自分の言葉で学校や図書館でおはなし会を実施することで自信を取り戻す機会にもなっている。外国人の方も自己有用感が必要である。自分が日本の社会で役に立つ、日本の社会で活躍するということが大切である。

以上の中で最も大切なことは対話することである。色々な活動は対話をするところから始まる。「地域づくりはどのようにしたらよいか」は「どのように対話をしたらよいか」ということである。

委員

日本の子育て中のお母さんのコミュニティにも繋がるものがある。支援されて元気になると、誰かを支援したくなる。支援を受けて育った子供は、自分が親になった時に自分の子供と同じくらいの子供を支援するようになり、代替わりで支援が継続していく。子供の支援方法は、自分の子供の成長と共に変わっていく。

委員

学校教育との棲み分けの問題があると思うが、学校で起こっている問題について、生涯学習の方でどれだけ入れるのか？

事務局

学校で起きている子供たちの課題ではなく、学校だよりの通訳や孤立している保護者への支援など、家庭への支援である。学校応援団な

ど、学校も一緒になって地域の社会をつくる。市町村教委とも連携をとって、公民館や学校などが一体となってやるようなイメージである。

委員 地球っ子クラブやてんきりんなどの運営資金はどうしているのか。来日している外国人の中には、母国語だけで暮らしているなど教育熱心ではない親もいるのではないか。出稼ぎ感覚で来ており、高校進学を考えていない人もいる。校長先生も外国人の支援に対する意識が異なる。

委員 人件費はボランティアなど、なるべくお金がかからないように運営している。資金は大変だが、文化庁の委嘱事業を受けている。大学の講師など専門家をお招きして、研修会や講演会等を開催し、人材育成に補助金を充てている。子供たちは可能性があるが、日本社会においてそれが伸びていく状況にない。親は様々な問題を抱えているので、予防的な意味も含めて支援しやすい。

議長 子供のみならず親も含めること、これが社会教育で行う意味である。

委員 公民館で、外国人講師が未就学の日本人親子に対し英語の歌の文化に触れる講座を実施している。幼少期からそういった機会に触れることが国際理解や多文化共生の観点から大切である。それを未就学の外国人親子に対し、日本文化に触れる機会をつくることが支援に繋がるということだと思う。

委員 外国人が一方的に日本の文化に触れるのではなく、日本人が外国人の文化を知ることが垣根を下げることに繋がる。例えば、「スリランカの文字で名刺を作る」など、日本人が外国の文字に触れる機会を増やすとよい。

委員 以前、公民館の親子料理教室の事業で料理を通じた国際交流をしたことがある。なぜ指で食べるのか等、食を通して文化が深まる。公民館がジョイント的な場所となり、学校以外の場所で行った。抽象的なことや、文字の世界にすぐ行けなくても、食を通してお互いを身近に

できる。こういった活動を通して、住んでいる人が顔を合わせることで、顔が見える関係になる。

議長 社会教育の施設を使用することも有効である。

委員 障害者の方が地域に貢献できる方法はないかを考え、放課後の見守り隊をしている。当初は、障害者は役に立つのかという意見もあったが、ヘルパーさんと一緒に行くなど、周りの理解が大切。即効性を期待してしまうと啓発的だったり、押し付けになったりするため、10年後20年後を見据えて支援していくことが大切である。どんな方でも貢献できる場をつくっていくことが必要である。

委員 図書館でも外国の方に日本語の絵本を提供している。クリスマス会も変えていかなければならない。日本人の感覚ではなく、地域に住んでいる外国の方も参加できるような、もう少し違うアプローチが必要である。まずは地域の住人に、その地域に住んでいる外国の方の国籍などを知ってもらうことから始めてもよい。

委員 ○○さんのお父さん、というように、学校に通う子供たちを通して地域の関係ができていけばよい。学校の信用力を元に、地域がつながり、災害の時などに役立てていければ良い。

議長 視点が2つある。ひとつは学校に通っている親子の支援。もうひとつは、就学前の子など、学校に通っていない人を支援するにはどのように工夫すればよいのか、という点である。

委員 支援する人と支援される人が混合している場所が色々できると良い。日本語ができないのは当たり前で、それでも社会や地域で活躍する場があるはずで、その人のことを受け入れることが大切である。

議長 てんきりんのような多文化共生の活動の場を広げるにはどうすればよいか。

委員 公民館など、多文化共生の事業をやっているところはたくさんあるのだろう。ニーズがあるところに、入り口をコーディネートすること

が大切である。

委員 P T A役員を決める時に、目が見えない方がくじ引きで総務部の部長にあたった。最初は「引き受けられない」と言っていたが、総務部の周りの方が障害者の方のために連絡手段としてL I N Eをやめ、電話に変えた。1年間役員を続けていただき、障害者の方も役に立てた経験から自信に繋がったようで、今でもP T A関係の活動を続けている。そういったことから、外国人の方にも積極的に役員になってもらいたい。学校との繋がりもできる。

委員 人数が集まらないとできないが、P T Aに国際部のようなものをつくってみても良いと思う。

委員 川口市では、外国人の子供が、「親が風邪をひいたので学校を休みます。」ということが多くある。親が日本語をうまく話せないため、子供が親の言葉を噛みくだいて先生に伝えている。それをフォローする先生に対する支援も必要である。特に外国人住民が多い地域の学校の先生に対しては必要だ。

委員 英語であればA L Tでフォローができる。他の言語は難しい。保護者向けに、得意な外国語のアンケートをとったことがある。何語が話せるとか、指導できるスポーツがあるのか、という内容である。また、父母には難しくても、祖父母ができることがある。掘り起こして探せばいっぱいある。保護者と地域は教育資源の宝庫である。P T Aが橋渡しになればよいと考える。

委員 S D G s が話題となっているが、企業にはグローバルな人材もあり、地域社会と一体になって貢献することが必要である。

委員 小さな地域は、学校が核になるべきだということを再認識した。コミュニティスクールを使って支援できる人がいるか声をかけることも必要である。

委員 学校が一番肝心である。しかし先生たちは多忙なので全てを任すことはできない。学校の先生を地域と結び付け、地域人材を生かすこと

が大切。そうすることで外国人児童も楽になっていくと思う。

外国人親子について、子供に通訳はさせない方がよい。親子関係が壊れたり、子供の都合の良いように通訳したりすることがある。

副議長

てんきりんのような多文化共生の取り組みが広がるのが理想であるが、やはり予算が気になる。行政は企業から資金を得ることはできないが、団体同士を結び付けたり、意見をもらったりすることはできる。

議長

次回の会議の進め方については、事務局と検討させていただく。それでは、本日の議事は以上で終了する。

